

水明インターネット句会（選句・選評）

令和七年十二月

「いのち丸ごと」の表現が秀逸。中七が秀逸。

ねこ
はっち
凡士
ひろ志
風子

た。日向ぼこの本意ですね。中七が秀逸。

冬夕焼心和むや山の鐘

展平

宇田靖之

太陽にいのち丸ごと日向ぼこ

下五の季語が良い。

光雲2
梗舟
ありぎりす

木漏れ日をはらりと乱す落葉かな

のり子
月
を
暦文
はっち
しーしー
名負人

案の定京は時雨て路地の店

最近は男性も編物を。失恋の悲しみは日々薄れていきますよ。
直つてください。「三日」がうまい。早く立ち

檜鼻ことは

つぶ金

毛糸編む泣くのは3日ほどがいい

竹馬や前傾にして歩き出す

情景に対する強いインパクト。冬ざれた池の光景が広がる。

森佳月

しみず

松田素風

池涸れて顕になりぬ捨小舟

季語に付かない中七下五の日常の癖の動作との取合せに感服。

ありぎりす

総太郎
彩香

冬鶴や仰向いて飲む粉薬

千し大根白き小舟が雲に乗り

わろすね。老いとは、別れることです。納得します。しみじみとした一句です。いま

しみず

光雲2

和永 幹子
米山
ことは
大越
ありぎりす
六弦

誰か居てだれかがゐない年の暮

わろすね。单身赴任の夫が帰り息子は斯キー旅行祖父は入院色々想像できます。変わらないようで少しづつ身辺は変

この家のこの木の冬芽しもぶくれ

しきーしー

赤蕎麦の畑に残りし落暉かな

鳩蔓足に絡ませ枯野道

ひろ志

帰り花ながき夢より目覚めけり

新井のり子

しみず
蝸牛

烈風の嗚咽めきたる虎落笛

比喩表現が秀逸。中七が効いている。

水明インターネット句会（選句・選評）令和七年十二月

(2)

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
土瑠 梗舟 ありぎりす		暦文	米山 絵夢 六弦	つぶ金 わがん	龍野 大越 風子	破れ蓮		ねこ 名負人	たくみ	霜里	春駒 寒立馬	癒香	龍野 かれん 風子	
待合に。ポインセチアと猫駅長 <small>「ポインセチア」と「猫駅長」の取り合わせが面白いと思います。妙で、なかなか駅舎が想像されます。ポインセチアと猫駅長の取り合わせの</small>	巨星墜つ空はスカスカ十二月 <small>お仕事お疲れ様でした。</small>	温泉にヘルパー二人小晦日 <small>呼吸止めるが良い。家を生き物として、白さと静けさで世界が一度リセットされたよう。静かな雪の朝です。白さと静けさで世界が一度リ</small>	家々の呼吸を止めし雪の朝 <small>五千石氏の詩情を感じます。言いたいことがあれば小さな声で言うのでしょうか。可憐な表現です。</small>	顔寄せて声を聞きたし冬堇 <small>年末のあわただしさが伝わる。先生だけでなく鬼も多忙な12月。</small>	大津絵の鬼も出払ふ師走かな <small>参道の樹相あらはに枯木立 参道の落葉した様子を上手く捉えている。</small>	春待つや孫の高砂父になる <small>「余白深まる」の表現が秀逸。</small>	もの持たず余白深まる年の暮 <small>不思議さの力技。</small>	子を首に巻いて枯野の父となる <small>冬ざれや喪の葉書つむ机かな 年瀬の静かな喪失感。</small>	襟巻に老の息さへ暖かし <small>人気のない売家と冬ざれという季語が寒々としていて秀句。季語を活かし季語を信じる。その情景をしみじみ感じた。</small>	一人来て風となりゆく枯野かな <small>なんとも可愛い。</small>	格好いいのに豚になつてる風邪つべき <small>枯野の寂しさが伝わる。広い枯野の中に風に吹かれて佇んでいる様子が出ていて、枯野の寂寥感よく出ている。</small>	新暦文 <small>荒一葉</small>	網野月を	
高田はっち	神谷たくみ	高原ひろし	春駒	かれん	河野凡士	安田蝸牛	和田イチ子	しんい	森下山菜	高松和永	大越マーガレット			

水明インター ネット句会（選句・選評）令和七年十二月

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	
	彩香	癒香	龍野 わがん				瞳人 田猫	のり子	和永 山菜		荒一葉 佳月 樂大越 霜里	ねこ しんい 展乎 かれん たくみ ひろ志	かれん しみず 山菜 しーしー	春駒 六弦	
	新酒垂れ五感の機微や櫂伝ふ 古の乳香纏ふ聖夜かな	夕映えはステンドグラス冬夕焼け ステンドグラスが引き立っている。	顔見世や胡坐啖呵の緋縮緬 フランスキンセンスの香る聖夜とは神々しさの中に安穏が流ます。	柿の実のずつしり重く枝垂るる枝 歌舞伎の一場面が目に浮かぶ。見せ場をリズム良く切り取つていて、その場に立ち会つてゐる感じに思わせる。	路地裏の隠れ家カフェや冬灯 透けてゆく質疑日本のふゆ日差し	極月のレーダー照射国を刺す やたらの、時事句きらいもいいけれど、ズバッとくれば選びます。緊迫感と憤りを季語に託した時事俳句。	子ら寝入り静謐やぶる除夜の鐘 一年間、喜憂があります。山襞を老人の深い皺と見立て、閑かに老人が眠つてゐる姿なのだろうか。	散り切らぬ公孫樹落葉や音うすく 自慢話に聴こえそ。愚痴なのが惚気か自慢かちゃんと聞いてあげましょう。	襞々に宿るひととせ山眠る が眠つてゐる姿なのだろうか。	幸せの滲む愚痴聞く年忘れ 優しさ。聞かせたい愚痴、聞いてあげましょう。	美しき数式生まれ冬銀河 幸せそうな愚痴なら楽しく聞けそうです。愚痴かのろけか。年の瀬は	夙の研ぎ澄ましたる纖月よ 銀河の美しさはそれを凌駕つするでしょう。美しい数式と言われます。オイ宇宙？	マンションの灯の揃ひたる歳の暮 心と思考回路が、季語と響き合う名句。	学校や職場が年末で休みとなり家々には灯りがついている。年末の情景がよく出でます。一幅の絵画のようないい。古から受け継がれた業でしようか。問題が解けた瞬間の表現が良んだ。	
	絵夢	癒香	雪待月田猫	染谷風子	丸井ねこ	峰岡名負人	岡崎梗舟	秋谷風舎	岡本たか子	青木鶴城	総太郎	わがん	龍野ひろし	小林土璃	岩清水彩香

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月

(4)

水明インターにて句会（選句・選評）令和七年十二月														
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
土瑠 つぶ金	霜里 幹子		樂 蝸牛		土瑠 光雲2 梗舟				総太郎 瞳人				寒立馬	彩香 俊之 わがん
冬雲雀風の死角へ鳴きにゆく 死角が響きます。 冬枯れの中を動き回る雲雀をよくとらえていると思ひます。冬・風・	炬燵より返事のあれど待たされり ななかな出られないんでしようか。 経験者は多いはず。上五から中七への措辞が良い。	野辺山のパラボラ不動寒昂 火を出られないのよ。返事があつたものの、中々暖かい炬	児を見ての髪の湿りに湯ざめかな 火を出られないのよ。返事があつたものの、中々暖かい炬	駅前の列なす傘に細雪 火を出られないのよ。返事があつたものの、中々暖かい炬	革ジャンを脱ぎ装着す抱つこ紐 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	艶やかに紅き実七つ冬隣 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	新婚や四畳半間の置炬燵 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	新酒やぐい飲みひとつ椅子むつ 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	雑炊やまたひと回り干支巡る 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	落ちぬよう春へ抱きつく枯葉かな 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	酒酌みし窓の外には冬銀河 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	ハタハタの身ほろとほぐれ酒すすむ 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	首手首足首射抜くからつ風 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。	手のひらを合わせ手袋仕舞いけり 中七がちょうど窮屈ですが、現代的父親像をよくとらえていると思ひます。生活感が滲み出でます。
光雲2	衛	しーしー	松田素風	しみず	ありぎりす	檜鼻ことは	森 佳月	つぶ金	展乎	米山カロ ーリング	宇田靖之	寒立馬	平野 楽	霜里

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十二月

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	ユーモラスな一句である。 越前の荒磯が表現されている。
絵夢	しんい	田猫							凡士 瞳人 名負人	荒一葉 佳月	のり子 俊之 しんい ことは はつち 展乎 春駒		蝸牛	破れ蓮	
数へ日の十度は覗く納戸かな	澄みて無音の雪景色。 年のは瀬、正月準備に忘れる物がないかなど年の瀬の”そわそわ”感が、ユーモラスに描かれている。	冬帝の統べる静寂や銀世界	凍空や駅のホームのラーメン屋	ほつとかれ不機嫌な猫年用意	バビロンの塔崩れゆく落葉期	初氷ひかり確かに風の紋	お湯かけて福呼ぶ七福詣でかな	枯蠟螂懺悔の祈りも無かりけり	冬晴れや槌音高く廃屋跡	夙や会わなきやよかつた同窓会	夜回の夫待つ妻の手編み棒	メモ一つ消し一つ足す十二月	さわさわと竹の葉ずれよ小春の日	波の花舞ふ越前の荒磯（ありそ）海	
高原ひろし	安田蝸牛	かれん	河野凡士	森下山菜	和田イチ子	しんい	大越マーガレット	高松和永	網野月を	新暦文	荒一葉	ひろ志	破れ蓮	新井のり子	

ラーメンの湯気と季語の対比が鮮やかで、ラーメンをすりたくなる句。

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評）令和七年十二月	
	寒立馬	荒一葉	幹子	樂俊之									和永光雲2	つぶ米山山菜しーしー絵夢月を	迷子になりたいときあります。迷子になりに行くが良い。すさまじく諧謔を効かせた句でんな！「迷子になりに」が良いですね。季語がありましいです。心の曖昧さ・搖らぎ・解放を見事に支えている。時間に余裕があつて羨ましいです。	
Y o u T u b e またアヴェマリア師走かな	男には男の辛さ空つ風	数え日や窓拭く爺の力こぶ	「そうだなあ」と共感しながら沁みた。 老いにもまだ役割があるのは嬉しいのです。	きみを思う気持ちをリズム感よくまとめられたと感じました。 やるせない。此岸のあれこれから一抜けて嬉しいのだろう。	にごり川きみが育つた冬の町	極月もモーゼの苦難恨む人	更科の蕎麦を食して大晦日	冬帽子みちのくの日の有難き	年用意表札の文字なぞりつつ	そぞろ寒ハローワークの帰り道	のうのうと妻の実家の置炬燵	帰り花ひとつ老い木に来てとまる	かくれんぼ鬼をみてゐる冬薔薇	去る君の靴音残る冬の月	初時雨街へ迷子になりに行く	コツコツという乾いた音ですか。
雪待月田猫	染谷風子	岡崎梗舟	峰岡名負人	青木鶴城	秋谷風舎	岡本たか子	龍野ひろし	総太郎	わがん	高田はつち	小林土璃	岩清水彩香	春駒	神谷たくみ		

水明インターネット句会（選句・選評）令和七年十二月

(7)

			102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	ことは 凡士 たくみ
									ひろ志			暦文	総太郎 佳月 展平		
													来年こそ良い年に。恙なきが一番。		裸木の灯りの化粧にほひ観に
													何事もなく夕暮れて冬至粥		のりたまのふくふく香る冬休み
													闇の世の一陽來復明けたり		読むほどに心が温まる一句です。超ロングセラーののりたま、のりた まだけで一膳いかけたよ。ふくふくが効いてます。季語もぴったり。のりた
													まつたりと日だまりぬくし冬の朝		
													冬の夜や赤きテントの町中華		
													山茶花や想いを馳せる来し方を		
													年瀬の瀬の膨らむスクランブル交差点		
													緑の本一番上にある師走		
													裸木の隙間に見えし千切れ雲		
													初雪やエレベーターは最上階へ		カフェラテを買はねばならぬ冬木立
													石川順一		石川順一
													佐藤幹子		佐藤幹子
													平野 楽		平野 楽
													寒立馬		寒立馬
													癒香		癒香
													霜里		霜里
													絵夢		絵夢
													丸井ねこ		丸井ねこ